日本へのアジア的関心

MyongGwan Ji (池明観: Former Professor, Tokyo
Woman's Christian University)

✉ uzzanzi@korea.ac.kr

(韓国)元東京女子大学教授・元翰林大学校日本学研究所所長。著書に『韓国からの通信』全4巻(日本:岩波書店、1974-1980)、『韓国民主化への道』(日本:岩波書店、1995)、『日韓関係史研究1965年体制から2002年体制へ』(日本:新教出版社、1999)、『韓国文化史』(日本:明石書店、2011)、『境界線を超える旅池明観自伝』(日本:岩波書店、2005)等多数。

The Role of Japanese Studies in Forward-Looking Asian Studies

It is essential for Japanese studies in Korea to focus on the influence of the relationship between Korea, China, and Japan on modern Japanese history, as well as the significance of the development of their relationship in Northeast Asian and world history. While Europe has undergone self-reflection on its past wars and history and achieved integration, Northeast Asia has not yet engaged in such self-examination. Korea is one of the few partitioned countries in the world, which is a legacy of the Japanese occupation of Joseon as well as of the aftermath of the Cold War between the US and the Soviet Union. The political wherewithal to resolve this issue has not yet emerged in Northeast Asia, and nationalist impulses in the region are strong.

Japanese studies scholars should focus on the relationship between Korea and Japan and the necessary direction of Japanese studies in Korea, rather than on this political issue. In addition, the desirable direction of Korean studies in Japan should also be assessed. This can be conceived of as an extended joint research field comprised of Asian studies carried out by Asian people. We should when necessary criticize and

resist nationalist developments, and supersede obsolete ideologies. We should aim to study diversity and culture in order to foster peace in Northeast Asia, and identify a direction that Japanese studies can take in order to go beyond a politics mired in nationalism. All this can be supported by Asian studies performed by Asians. The goal should be to overcome the current political confrontation between Korea and Japan through civil solidarity. Based upon this solidarity, the birth of a new era of Japanese studies can be achieved.

Keywords Northeast Asia(北東アジア), Japanese Studies(日本学), Korea-Japan Relationship(日韓関係), Asian Studies(アジア研究), Civil Solidarity(市民的連帯)

北東アジアの近代史を、日中韓の三国関係を中心にして日清戦争の始まりから考えるとすれば、それは125年の歳月の歴史を振り返ることになるであろう。それをまた第二次世界大戦の終焉から今日に至るまでに区切るとすれば74年、これは日清戦争の始まりから真珠湾攻撃の期間よりも20年以上も長いことになる。

日中韓の三国関係は日本の近現代史においてどのような様相を呈していたのだろうか。またこの三国関係はこれからの北東アジアの歴史において、どのように展開されることか。そしてそれは世界史に対してどのような意味を持つことになるだろうか。韓国において日本学を志すとすれば、これは避けられない問いであるといえよう。ヨーロッパにおいてはヨーロッパの統合を達成してから、この頃世界の状況を見渡しては、ロシアのプーチン大統領、アメリカのトランプ大統領、そして中国の習近平主席はいまだに国家主義的権力に囚われている

と憂えているという。それはヨーロッパの彼らが世界史的統合の課題は今や北東アジアの前に来ているのにとっているからであろう。

ヨーロッパでは覇権を争って第一次、第二次と世界大戦にまで及んだ悲しい歴史を嘆き、ついにヨーロッパ統合を達成した。しかし北東アジアではいまだにそのような歴史を前にして悩んでいるようには見えないのであろう。韓国はいまだに世界史の中で唯一残されている国土分断、南北分断に喘いでいるではないか。これは戦前の日本の朝鮮支配が残した遺産であり、戦後米ソの冷戦による後遺症である。これを清算しうる政治力はいまだに北東アジアにおいては芽生えていない。それを取り巻く国際的状況は確かにいまだに国家主義的敵しいせめぎあいにあるといわねばならない。

このような政治的論議をここに長ながとくり広げようとは思わない。われわれの課題は日韓関係のことであり、韓国においては日本学がいかに展開されるべきかということである。ただ日本における韓国研究はいかにあるべきかということは、ともに考えるべき課題ではなかろうかと思う。アジア人によるアジア研究という共同の拡大された研究フィールドとでもいおうか。

北東アジアはヨーロッパに比べて海を隔てて広い地域を占め、そして中国がその中心、広大な地域を占めていたためであろう。中華と四夷の思想の下で孔子、孟子、老子などと伝統的に文化または思想が中国において成立し、長いことそれが周囲の国々に大きく影響して来た。そして近代に至るまで北東アジアの中国以外の地域に成立した文化や思想が中国に影響するということはほ

とんどなかったといわねばなるまい。その意味では文化の相互交流の伝統はこの地域ではほとんど見られなかったといえよう。ヨーロッパでは地域によって用いる言語を異にしながらもダンテ、ペイコン、ミルトン、ルソー、カント、ゲーテなどと文化や思想を共有し、後日おのおの国家を異にして対立と戦争をはらみながらもヨーロッパ文化という共同の伝承を可能にした。そのために第二次世界大戦後その文化と思想が国家という枠を超えるヨーロッパ統合を生み出すことができたといえるかもしれない。

北東アジアの近代史において、日本の朝鮮に対する政治的支配が終るまで、朝鮮またはアジアに対する日本の学問的営みはどのようなものであったのだろうか。逆にその時代における朝鮮またはアジアにおける日本に関する研究または関心はどのようなものであったのであろうか。このような問いは日本における今日における朝鮮研究またはアジア研究の出発点をなすべきではなかっただろうか。その時初めてアジア諸国における日本研究は、日本におけるアジア研究と共同の場に立つことができるであろう。日本が近代史以降政治的または経済的優位に立ってアジアに対して示していた学問的関心、それは今どのように継承されるべきであろうか。またそのような時代におけるアジア諸国の日本研究はどのように継承されるべきであろうか。今日のわれわれの研究はそれを発見し、それを継承しなければなるまい。その時、伝承の継承は批判を媒介とすることであることはいうまでもないであろう。

今はかつてのイデオロギー的立場を離れて時には国家主義的権力に抵抗し、それを批

判せざるをえないことになるかもしれない。北東アジアの平和のための文化、反時代的とでもいおうが国家主義的夢にとどまろうとする理実政治を超えようとする日本学の研究方向、そのようなアジアにおけるアジア研究を目ざすべきであろう。いま日韓の政治的対立を目にしながらそれに代わるべき市民的連帯を目ざし、その上に立つ知的営みとしての日本学の新しい芽生えを期すべきではなかろうかと思うのである。